

自由ということ

理事（学生担当） 赤松明彦



新入生のみなさん，入学おめでとうございます。いまこの『学生便覧 2014』を手にしているみなさんは，これから始まる京都大学での生活がどのようなものになるのかと，少々不安も感じながら，しかし何か晴れやかな気持ちでいることだと思います。この冊子には，京都大学での皆さんの生活の助けとなるような色々な情報が書かれています。学生生活に必要な様々な手続きについて，さらに経済的なことや健康上のことで困ったときや，何か相談したいときに対応してくれる窓口について，また様々の課外活動とその施設，11月祭をはじめとする大学の課外行事に関しても書かれています。アルバイトに関する情報もあります。皆さんの勉学の助けとなる図書館や博物館について

の説明もあります。ですから，まずはこの冊子のページをひとつひとつ最初から最後までめくってみて下さい。みなさんは，おのおの学部に所属していますが，誰もが京都大学というひとつの大学の学生です。この『学生便覧』は，そんな「京大生」のためのガイドブックなのです。

さてそこで，「京大生」となられたみなさんに，是非ともしっかりと読んでおいて欲しいものがあります。この冊子の表紙の裏に掲げられている「京都大学の基本理念」です。これは，京都大学が大学として何を目指しているかを広く世間に示すと同時に，京都大学で学び，研究し，そして社会へ出て行く学生に対して，どのような人間になって欲しいと望んでいるかを宣言している文章です。ちょっと読んでみて下さい。

どうですか。何か気がつきましたか。そう，おそらくみなさん気がついたと思います。「自由」という語が何度も出てきます。5回も出てくるのです。京都大学の学風として，「自由と自治の伝統」ということがよく言われます。もちろんそれには理由があって，京都大学がこれまで刻んできた百年を超える歴史と密接に関係しています。しかしそれが単に京都大学の過去の歴史とかかわりのある事実としてあるだけのことなら，理念としてこんなにも繰り返して強調することにはならないはずです。ここで「自由」を強調するのは，現に京大生となったみなさんに，「自由」の大切さをしっかりと理解してもらいたいと願っているからに他なりません。それではいったいこの「自由」とは何でしょうか。みなさん少し考えてみてくださいか。

自由とは、勝手気ままに振る舞うことだとは言えないことは、みなさんの誰もがすぐ見当がつくと思います。なぜなら誰もが勝手気ままに振る舞うことはできないからです。みんなが勝手に行動すれば、いたるところで衝突が起こってしまいます。そして結局は自由でなくなってしまいます。

それでは、自由とは、何事にもとらわれないことだというのはどうでしょうか。私にはこれは大切なことのように思われます。特にみなさんのように、大学という新しい世界にこれから入ろうとする人たちにとっては、出来るだけとらわれない心をもって、目の前に新しく広がる学問の世界を経験しようとするのが大切だと思います。しかし、「何事にもとらわれない」と言いましたが、私たちが一番とらわれやすいのは、実は「自分」です。あるいは、自分の勝手な思い込みと言った方がよいかもかもしれません。私たちは、自分の勝手な思い込みやその場限りの一時的な自分の衝動を、自由な意志の現れだと思い込んだり、あるいはそのように言い張ったりすることがあります。本当に自由であるためには、そのような「自分」の現れ、あるいはそのような意識のはたらきがあることを知った上で、注意深くそれらを取り除くようにして、心が何事にもとらわれることなしに働くようにする必要があります。

自由であるとは、大きく心を開いて、新しいもの、自分とは異なるもの、異質なものを受け入れようということだと言ってよいでしょう。みなさんはこれから様々な学問の分野での学びを開始するわけですが、今まで経験したことのないまったく新しい世界がそこに開けてくるはずで、その世界に勇猛果敢に飛び込んで欲しいと思います。そして新しい世界の中で自分を鍛えて欲しいと思います。そうすれば、自由ということの本当の意味がわかるはずで、

最後に、リュシアン・フェーヴルというフランスの偉大な歴史家が、大学時代に友人となったこれまた偉大な歴史家マルク・ブロックとの大学での日々を描いた言葉を紹介して、皆さんに贈ります。

「大学では、我々の演習室は目と鼻の先とってよいほど隣り合っていた。しかもドアがいつも開いていた。中世史家が近代を、近代史家が中世を知らないなどということは許されなかったのである。学生たちは二つの演習室を往き来した。教師も一緒だった。またブロックと私はしばしば連れ立って宿舎へ帰った。本でふくらんだカバンの重いものにもかかわらず、ラ・ロベール通り通りの中央歩道を時の経つのも忘れて幾度となく往復した。このような雑談と意見の交換と瞑想の結果、ブロックは、私が1911年に宗教政治史というよりも経済史の、さらに経済史というよりも社会史の分厚い本の中で発見しようとして試みた、新しい地平線へと徐々に向かっていった。」(リュシアン・フェーヴル『歴史のための闘い』(長谷川輝夫訳、平凡社ライブラリー)より。)